

2021 年度外国語学部 FD 活動報告

(英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科)

2021 年度、外国語学部では FD 活動の取り組みとして、FD 研修会を 1 回実施した。

9 月 29 日に開催した「4 年間の学習成果の捉え方ープログラムレベルの評価の方法ー」と題する FD 研修会（オンライン）において、学部構成員の学びの評価についての見識を深めるため、京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授を講師に迎え、「学習成果」の意味、評価の可視化、プログラムレベルの評価等について講演して頂いた。講演中・講演後の質疑応答で活発な質疑応答・議論がおこなわれ、有意義な研修会となった。参加者は 43 名であった。

例年通りであれば、年 2 回の外国語学部主催の FD 研修会を予定していたが、コロナ禍等の影響もあり、前年度に引き続き上記 1 回のみとなった。2022 年度は改善できるようにしたい。各学科の FD 活動の詳細は、以下の通りである。

英米学科

<当初の計画>

- 1) 学科が管理する LL 施設の有効利用、および TA の効果的な活用方法などを検討する活動を継続していく。
- 2) 学科内ミニ FD の実施も含めて、学科内 FD 活動をさらに充実させる。
- 3) 学科カリキュラムと有機的に結び付けた視点から、長期の派遣留学生数の維持および更なる増加を図る方策の検討を行う。
- 4) 学科必修科目の内容および評価の標準化の努力を継続する。
- 5) 学科の各授業科目をさらに充実したものにするには何が必要か、学科会議等で議論を深めていく。

<報告>

2021 年度も 2020 年度に引き続き、コロナ禍の影響のため、当初の計画の幾つかは修正を余儀なくされた。そのような状況であったが、以下の FD に関連する活動・議論が行われたことを報告したい。

- 1) 学科必修科目の内容や評価基準については、「Academic English A」及び「Academic English B」のそれぞれの科目コーディネーターを中心に、共通テキストの見直し作業などを行っている。今年度は、「Academic English B」の内容と担当者を 2023 年度に向けて見直す過程として、2022 年度の移行措置としての運営方法を検討した。また、持続可能な学科のカリキュラム運営を実践するため、学科必修・選択科目の開講時期や追加・閉講すべき科目の見直しなど、学科教員間で話し合いが為されることもしばしばあったので、今後のカリキュラム改革にいかしていきたい。
- 2) 2021 年度も英米学科の幾つかの科目で COIL を利用した授業が行われた。具体的には、Academic English B, Special Topics in English: International Studies, 演習などの科目

である。2021年度も2020年度同様にコロナ禍のため、海外フィールドワークや国際センターを介しての交換留学も中止せざるを得ない状況になったが、COILのようなオンラインでの国際交流を今後さらに取り入れるようにしたい。

- 3) 2021年度は学科主催の講演会を一つ実施した。Dr. E. Nicole Thornton (Scholar-in-Residence, Racism, Immigration and Citizenship Program, Johns Hopkins University) によるアメリカ政治についての招聘講演イベントを2021年5月17日(月) 11:05-12:45に行った。学生だけでなく教員のFDという観点からしても実りある内容であった。

スペイン・ラテンアメリカ学科

- 1) 2021年度は、外国語教育センターの科目を主たる業務として担う1名の教員を新たに学科に迎えた。専任職のポストに就くのが初めてであり、また、昨年度から引き続きなかなか収束を迎えないコロナ禍の中、他の学科教員のサポートも受けながら、学科、外国語教育センター、非常勤講師の先生方のコミュニケーションがスムーズになるように取り持ち、学科運営に積極的に貢献していただいた。
- 2) 学科科目の運営については、例年通り、学科長・学科内教務担当者・スペイン語教育コーディネーターの三者を中心に、各種調整にあたった。前述の通り、コロナ禍は収まっていなかったが、専任教員・非常勤講師ともに、オンライン授業の運営にも慣れ、Zoomの使用にもほぼ支障はなくなった。学科必修スペイン語科目についても、例年通り、学科長、スペイン語教育コーディネーター、学科教務担当教員の連携の下、年間の授業計画を策定し、実行した。さらに、本学科の特性として、学科科目と外国語教育センター設置科目の両方にまたがる形で授業を実施する非常勤講師の先生方が多数いることから、外国語教育センターの業務を主とする教員の協力も大きかった。学科必修スペイン語科目の全体的な運営については、こちらも例年同様、スペイン語教育コーディネーターが、常に非常勤講師の先生方との連絡を密にし、彼らからのフィードバックを活かしながら、授業計画・内容に反映させた。スペイン語科目以外の学科科目に関する履修上の問題あるいは各科目担当者や当該科目を履修している学生からの問い合わせには、学科長および学科教務担当教員が、適宜すみやかに対応した。
- 3) 2020年度より始動した学科必修科目「研究プロジェクト」が2年目を迎え、初年度の試行錯誤を受け、ポートフォリオの作成、学科での卒業論文要旨のとりまとめを開始することとし、各ゼミで共通して当該科目に適用すべき条件等も学科会議で確認した。
- 4) 選択必修科目でもある「海外フィールドワーク」について、「海外フィールドワーク B」(メキシコ)は、コロナ禍のため、昨年度同様、実施に至らなかった。一方、「海外フィールドワーク B」(コロンビア)は、上智大学外国語学部イスパニア語学科とジョイントで、オンラインで実施することができた。さらに、「海外フィールドワーク A」は、例年の派遣先であるサラマンカ大学(スペイン)国際コースの協力が2021年度も得られ、2度目のオンライン実施に至った。例年参加しているサラマンカ大学日西文化センターの催し

「文化週間」についても、昨年度の経験を活かし、同センターの多大なるご協力の下、学科担当教員の指導とサラマンカ大学で日本語を学ぶ学生が協働し、学科学生が作成したビデオクリップを「文化週間」で上映する形で参加することになった。

- 5) 近年継続して教員交流を進めてきた輔仁大学(台湾)スペイン語学科と例年行ってきた教員の相互派遣は、2021年度もコロナ禍のため、残念ながら実施には至らなかった。
- 6) 学科の重要な行事の一つである「スペイン語劇」も、ロゴスセンターにおける通常の上演はできなかったものの、担当教員の指導の下、十分な感染症予防策を講じながら、動画を作成し、YouTubeのNanzanUniversityTVにおいて、期間限定で公開された。
- 7) 学科主催あるいはラテンアメリカ研究センターとの共催の講演会・研究会については、昨年度に引き続き、コロナ禍の影響は否めなかったが、これまでの経験を活かしながらZoomを用いたオンライン講演会の形で、翻訳・通訳、SDGs関連、ラテンアメリカの古代文明等、幅広いテーマについて実施された。また、昨年度に引き続き、学部の「国際キャリアを考える特別プログラム」、在外公館派遣員の説明会など、学生に国際社会で働くことを考えさせるイベントに学科教員が積極的に関わった。在外公館派遣員については、現時点で、ボリビア、ニカラグア、ソロモン諸島、コートジボワールなどに学科生が滞在しており、また、今後、メキシコやパラグアイ、ホンジュラス、チリなどに学科生および学科卒業生が派遣されることになっている。2022年度にスペイン語圏へ派遣される派遣員の募集総数のうち、その大半を本学学科生および卒業生が占めており、上記の在外公館派遣員の説明会の効果が現れてきていると考えられる。
- 8) 1年次生対象の学科必修科目「スペイン・ラテンアメリカの文化 A/B」(学科教員によるオムニバス形式)は、履修者が多いため、昨年度同様、Zoomで授業が実施された。しかしながら、昨年度の経験があるため、実施上特に問題は生じなかった。
- 9) オープンキャンパスは、対面での実施が可能になったので、「スペイン・ラテンアメリカ学科教員によるラテンアメリカ音楽ミニライブ」が復活した。限られた人数ではあったものの、体育センターでの学科説明会では学科学生に協力してもらい、学科で学ぶ学生の生の声を届けることができた。また、模擬授業を通じ、スペイン語圏の言語、文化、社会、歴史等を紹介した。

フランス学科

- 1) 2021年度は学科内において定期的にミーティングを開催し、カリキュラムおよび授業運営に問題がないか検証した。その結果を踏まえて他学科とも協議した結果、スフドア学科において2022年度より専攻別入試を廃止して2年次から専攻を分けることになったことにより、それに応じてカリキュラムの改正を行った。また、FLECを主な業務とする特別任用講師が今年度限りとなり、共通教育のフランス語教育に大きく影響することが予測されたため、2022年度以降共通教育フランス語の運営をいかに行うかについての議論を行い、新たな授業運営方針を設定した。

- 2) 履修ガイダンスや学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトや SNS の充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。
- 3) 新カリキュラムの「海外フィールドワーク」は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、リヨン・オルレアン双方において実施を断念せざるを得なかった。代替科目として「フランス語ワークショップ」のクラスを増設して対応した。
- 4) フランス語教育促進のための、学生によるフランス語劇は 12 月に上演を行った。また、京都外国語大学主催による全日本学生フランス語プレゼンテーション大会に参加する本学科生 2 名のための指導を行い、1 名が入賞した。
- 5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定や TCF などの外部語学試験の団体受験を推奨した。
- 6) 学科の Facebook の更新およびオープンキャンパスや高校における模擬授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。さらに科研費間接経費を用いて学科作成 Web ページを全面的に更新することになった。

ドイツ学科

- 1) 2022 年度から専攻選択は入学時ではなく、1 年次秋学期に行われることになった。その制度変更も受け、各専攻の必修単位数がアンバランスであった点を調整するカリキュラム改正を行った。また、新任の教員の専門性に合致する科目を新設するなどした。
- 2) ドイツ語教育のクオリティおよび教員の資質向上のため、主に外国語科目を担当する教員を中心として、定期的に授業の進捗などについて情報共有、意見交換を行うことで、教員間の密接な連携を図った。その連携には学科専任教員だけでなく、外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況全体に目配りが行き届くよう努めた。
- 3) 「海外フィールドワーク」不開講にともない、2 年生を対象に、「海外オンライン語学講座」としてドイツの大学機関が提供するドイツ語講座を受講させ、本学の科目との代替単位認定を行った。これにより、学科生の学びの選択肢が増えた。学生も普段と異なる教員や受講生とオンラインで繋がり、多くの刺激を得ることができた。
- 4) ドイツ学科主催講演会（ヨーロッパ研究センターとの共催）として、以下の講演会・シンポジウムを開催した。①2021 年 10 月 14 日「近代日本とドイツ～文学・宗教・ナショナリズム～」(登壇者：藁谷郁美・Richard Szimpl・Esben Petersen) ②2021 年 10 月 27 日「難民のおかれた現状：日本の場合」(講演者：羽田野真帆)、「ドイツにおける難民の保護・受け入れ・支援～歴史と現在～」(講演者：久保山亮) ③2022 年 1 月 11 日「スイスの外国人・移民・難民政策と「外国人過多 (Überfremdung)」という概念」(講演者：亀山洋子)。どの講演も内容は充実しており、学生はもとより教員にとっても新しい知見を得る良い機会となった。
- 5) 学科ホームページを通じて、学科独自の情報発信に努めた。特に今年度は、留学体験談やインターンシップ経験談、学生達の活躍などを多く掲載することができ、ドイツ学科を受

験しようとしている高校生へのアピールにつながった。

- 6) 学生の勉学の支援、成果発表の場として本学科が他の教育機関等と連携して行っている一連の催しは、例年同様 2021 年度も充実したものであった。11 月に開かれた「南山大学ドイツ語弁論大会」は他大学からの参加も多くあり、学びの成果を発表する良い機会となった。12 月には、ドイツ語演劇（ブレヒト脚本）をフラッテンホールで上演した。学生の真摯な取り組みがよく伝わってくる内容であった。この他、12 月に開催された第 21 回名古屋圏国公立大学インターゼミナール（総参加者数約 80 名）に中屋ゼミ生 5 名が参加した。各自ドイツ・EU 経済に関する卒業研究に向けた内容を発表し、他大学学生と活発な議論を行った。
- 7) ドイツ語能力検定試験は、各自申請して受験した。A2 レベルは 4 名、B1 レベルは 3 名、C1 レベルは 1 名、独検 3 級は 5 名、独検 2 級 8 名が合格した。
- 8) Kreis やドイツ文化研究会などの学科生の課外活動への支援を継続した。
- 9) キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、学科生全員を対象とするキャリア入門講座を Q3 に、それぞれオンラインで実施した。

アジア学科

- 1) 学科必修科目、とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点および受講生の学習状況について意見交換をおこなった。
- 2) 学習成果測定の試みとして卒業論文評価用のルーブリックを作成し、卒業論文判定会議において活用した。
- 3) 「海外フィールドワーク」はコロナ感染状況の改善がみられないために 2 科目とも不開講のやむなきに至った。これにともない参加できなかつた 2 年生を主な対象として、東アジア専攻では輔仁大学（台湾）の学生と、東南アジア専攻では BINUS 大学（インドネシア）の教員・学生と SNS で交流するプログラムを実施した。
- 4) 学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、Zoom やメール、SNS を活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。また、授業運営についても学科教員と非常勤講師の間で随時連絡をとって意見交換をおこなった。
- 5) 学科作成ホームページに、今年度も幾つかの学科科目を紹介する欄を追加した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。また、学科公式 Instagram および YouTube チャンネルの開設に向けて準備を進めた。
- 6) 2020 年度は中止としたインドネシア語スピーチコンテストは、残念ながら 2021 年度も中止せざるをえなかつた。
- 7) 中国・台湾およびインドネシアへの国費留学希望者に対する支援として、個別相談への対

応や国際センターの業務への協力を継続しておこなった。

- 8) 上記 3) でも触れたが、「海外フィールドワーク A/B」の不開講にともない参加できなかった 2 年生を主な対象として、東アジア専攻では輔仁大学の学生と SNS で交流するプログラムを 2020 年度に続けて実施した。グループ単位や個別での交流に加えて学科演習科目での発表・意見交換という形での交流もおこなった。東南アジア専攻ではジャカルタの BINUS 大学の教員・学生と本学科の教員・学生の交流をはじめておこなった。
- 9) FA.com など在学生の課外活動への支援を継続した。
- 10) キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、2 年生を対象とするキャリア入門講座を Q3 にそれぞれオンラインで実施した。

以上